

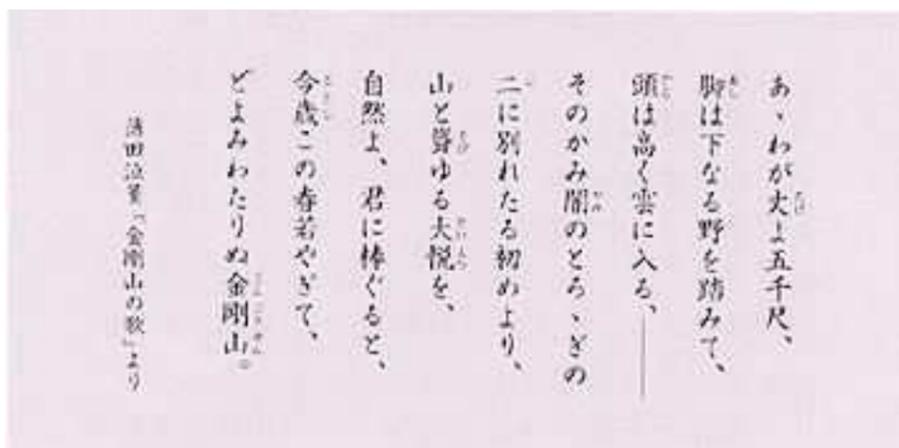
9 薄田 泣菫文学碑

■場所

中央区上本町西四丁目
東平北公園内

■交通

地下鉄：谷町九丁目
(8号出口)



薄田 泣菫(1877年～1945年)

薄田泣菫(本名 薄田淳介)は、明治10年(1877年)岡山県浅口郡大江連島村(現倉敷市連島町)に生まれ、昭和20年(1945年)10月9日死去した。

故郷の小高い赤土の松山と遠浅の瀬戸内の海辺での遊びが、彼の自然感と動植物への親近感を育んだ。

玉島高等小学校(現玉島小学校)を卒業し、岡山中学校(現朝日高等学校)に入学したが2年で中退。

明治 27 年に上京、漢学塾に寄宿しながら上野の図書館に通い、和漢洋の文学書を読み、独学で勉強した。

明治 30 年、『新著月刊』に投稿した「花密蔵難見」13 篇の詩が認められ、詩壇にデビューした。

明治 32 年、第一詩集「暮笛集」を大阪の金尾文淵堂から刊行、与謝野鉄幹に高く評価された。翌 33 年大阪で、金尾文淵堂の文芸誌『小天地』の編集に当たった。

明治 34 年、第二詩集「ゆく春」を、翌 35 年、「公孫樹下にたちて」を刊行。さらに、明治 38 年、第三詩集「二十五絃」を、翌 39 年には泣菫一代の名詩集「白羊宮」を刊行し、島崎藤村、土井晩翠の後を受けて、蒲原有明とともに代表的詩人となった。

詩人としての活動は、明治 41 年頃をもって終わりをづけ、一時小説の筆をとり、随筆を多く書いた。

大正元年、大阪毎日新聞社に入社、夕刊に連載した「茶話」は好評を博した。

選抜高等学校野球大会歌の作詞者でもある。

「金剛山の歌」は、明治 36 年『新小説』に発表した作品で、谷町八丁目にある本長寺に仮寓していた頃、毎朝早く起きて付近を散歩し、華やかな朝日を浴びて金色に輝く葛城山嶺に感動して歌ったものである。東平北公園のあたりは、その頃散歩した場所と思われる。

墓所は、岡山県倉敷市連島町の自家墓地。